

それぞれの大切なふつう

国府小・6 日浦 悠那

「ん？ふつうって、なんだろう」

この本の主人公のめぐさんの疑問が、読んでいる私にも『なんだと思う？』と、問いかけているように思えました。私の読んだ「赤毛証明」という本は、髪の毛の色が元々赤茶色のめぐさんが、中学校の先生に赤毛は地毛だという事を証明するゴム印を生徒手帳に押されたことをきっかけに、「ふつう」について考え始めるお話でした。この本を読んで、心に強く残った場面が二つあります。

一つ目は、生徒手帳に『赤毛証明』と書かれたゴム印を押されただけでも嫌な気分になるのに、毎朝先生に見せなければならなくなり、自分はふつうではないのかと疑問に思う場面です。めぐさんは、赤毛証明のゴム印を押されたことに対して、あなたは「ふつう」じゃないと言われているようで、とても悲しかったり怒ったりしていました。ふつうとはどんな事かと家族に聞いてみると、とびぬけていない、世間の常識に収まっている人、人によって変わるものなどと様々な意見でした。また、インターネットで調べたら、「広く通用することから」と書いてありました。私は、「ふつう」について今まで一度も深く考えたことがなかったので、今回ふつうとは何かについて考えてみました。「いつも通り」これが私の考えるふつうでした。めぐさんのようにふつうについて疑問に思う事もなく、今まで生活してきました。もしかすると、ふつうは幸せな事なのかもしれない

と思いました。

二つ目は、障害を持っている絃君が、

「これが、おれのふつうだから。」と言っている場面です。絃君は、生まれた時から両下足欠損で膝から下が両足とも無く、車いすで生活しています。しかし、この状況を彼は「ふつう」と言っています。私は読んでいて車いす生活の彼をふつうとは思わないので、とても驚きました。車いすでの生活はとても大変そうで、私には想像ができません。生活できるのかと、とても不安になります。ふつうとは人によって違うものなのかもしれないと考えた時、私のクラスの友達のことを思い出しました。私のクラスには外国から来た友達がいます。その友達は、日本語を少ししか話せません。私にとってはふつうではありませんが、友達にとっては、これはふつうです。日本語を話せる事がふつうではないのです。聞いたことはありませんが、友達は日本に来て不安だったのかなと今、思いました。この場面を通して、ふつうとは人それぞれで一つではないのかもしれないと思いました。「これがふつう」とすぐに決めつけずに自分や他の人の個性を認め合いたいと思います。この本の絃君のような障害を持った方の「ふつう」も、友達や家族の「ふつう」も自分の「ふつう」もそれぞれの大切な「ふつう」なので、大事にしていきたいです。